碑あり、重さ三十貫、秀五郎遊戯の際之を肩にして徒歩し、村人を驚歎せしむ。十五歳の時、家例により、祖父に伴はれ、相州大山に參詣す、途江戸を過ぎ、相撲大關玉垣額之輔に遭ふ。額之輔秀五郎の體格拔群なるを觀、力士たらしめんと欲し、旅舍に來りて再三勸誘して已まず。遂ひに社寺奉行水野越前守及び綱島地頭三雲新左衞門等の力を籍り、强請す。是に於て玉額の弟子と爲り、力技を習ふこと三年。十八歳の時、本場に顯はれ、突出小結に班せらる。これ本邦突出小結の嚆矢なりとす。爾來每場勝利を得、名聲忽ち都下に鳴り、侯伯に愛顧せられ、其肖像繪は店頭に販がれ、一日數百枚を賣出するに至る。然るに同士間の嫉妬を受け、頗る危險なるを以て、其師玉額之を憂ひ、難を京阪地方に避けしむ。秀五郎關西地方に在ること五ケ年、公卿縉紳の眷寵を受け、名聲又山陽南海に轟けり。後再び江戸に歸り、雷權太夫の養子となり、名を錣山鷲之輔と改め、益其怪腕を振ひ、天下敵するものなかりしが、果して同僚に嫉まれ、文政二年四月十日鴆毒せらる、時に年二十八。秀五郎の力量の非凡なる曾て木梯を列ね、米十八苞を積み、雙手之を扛げしと云ふ。秀五郎優に大關の資格を具えしが、其師玉額大關たりしを以て、之を越ゆる能はず、僅か關脇に止まりしといふ。

二代目高砂浦五郎

二代高砂浦五郎。本名今關吉太郎、山武郡豐海村粟生の人、今關宗次郎の長男にして、嘉永五年三月を以て生まる。幼にして强力あり、初め千鳥崎と稱し、宮相撲をとれり。明治六年初代高砂小柳と共に、東總地方を巡業せる際、其知る所と爲り、初代高砂東京相撲を脫し。改正組を組織するや、其意氣に感じ、同志十餘人を率ゐて、改正組に加盟し、響矢宗五郎と名乘り、陰に陽に高砂を援け、奮鬪努力せり。十一年五月改正組の大相撲組に合併するや、幕內格と爲り十五年一月西方小結に上り、初代高砂の前名高見山を續ぎ、十七年五月當時天下無敵と稱されし、横綱梅ケ谷を打破り、名聲を轟かし、十八年一月關脇に進み、二十一年五月年寄阿武松綠之助の名跡を繼ぎ、二十三年一月檢査員に擧げられ、三十一年取締役に推され、三十三年二代目高砂浦五郎を相續し、內外の信用を博せり、大正三年七月歿す、年六十三。

因にいふ。次の阿武松綠之助は、山武郡白里村四天木の人、慶應三年七月を以て生まれ、初代高砂の門に入り、大見崎と名乘り、三十三年一月新進の大關梅ケ谷を破り、名聲を博し、三十六年一月年寄阿武松を相續し、檢査員たり。

鳳凰馬五郎

鳳凰馬五郎。幼名寅之助、千葉郡津田沼町久々田の人、慶應二年を以て生まる。幼にして軀幹長大、非凡の力量を有せり。十二歳の時より船橋町酒造家大和屋の丁稚奉公たり。常に酒樽或は米俵など、手玉の如くに取扱ひ、附近の人々を驚かせり。十八歳にして某氏の養子と爲り、家庭不和の爲め離縁し、二十一歳の時力士たらんと志し、千葉縣出身の力士宮城野馬五郎の門に入り、菊田山と名乗り、明治二十年五月より荒海と改め、前相撲をとり、二十三年には既に幕下に進めり、是より名を鳳と改め、二十五年五月幕下十兩に入り、更に名を鳳凰と改め、翌二十六年一月幕内と爲り、爾來累進し、二十九年五月關脇と爲り、三十一年一月張出大關に進み、同年五月西方大關に昇り、名聲高かりしが大酒の爲め、健康を害し、三十六年引退するの已むなきに至り、名を宮城野と改め、年寄役たりしが、四十年遂に永眠す、年四十二。門下中鳳谷五郎（印旛郡大杜村字六軒出身）出で、横綱の榮冠を得たり。

小錦八十吉

小錦八十吉。山武郡横芝町料理店岩井屋彌市の子にして、慶應三年十月を以て生る。父彌市力量あり、岩城川と稱し、宮相撲の大關たり。二代目高砂浦五郎當時千鳥崎と稱し、屢岩城川を訪ひ、八十吉の體格尋常ならざるを見、力士たらん事を勸む。八十吉また力士として世に立んことを志し、明治十三年春東京に出で、初代高砂の門に入り、高砂の前名大錦に因み、小錦と名乗れり、時に年十四。好角家の爲め忽ち非凡の技倆を認められ、十九年五月一躍幕下の中央に進み、二十一年一月幕下十兩に入り、連戰向ふ所敵なく、名聲湧くが如し、二十二年五月小結に上り、二十三年五月關脇を經ずして、東の大關に昇進し、角界のレコードを破れり、時に年二十四。爾來六年間好成績を續け。二十九年五月吉田司家より本邦十四代の横綱を免許せられ、三十一年五月横綱として欄外に張出さるゝまで、前後九ケ年間、大關の位置を繼續し、明治相撲界の花と唄はれ、三十四年一月引退して年寄二十山を相續し、二十山重五郎と改め、檢査員、取締等に擧げられ、大正三年十月九州巡業中客死す、年四十九、

實業家

高木與兵衛

高木與兵衛。長生郡東村地引區字八板の農杉野治兵衛の第四子にして、天保

十年四月を以て生まる。十二歳の時、同郡立木區高橋氏の雇人となり、潛に文學を以て名を成さんと欲す。高橋氏苦學の困難なるを說き、寧ろ實業界に入り、身を起さんことを勸む。是に於て長南町の藥種商伊勢屋の丁稚と爲り、忠實に務むること十四年。明治の初め、横濱に出で、貿易業を營み、特に藥品の輸入に力を盡せり。適々小兒藥百一方本舗高木與兵衛の知る所と爲り、養嗣子に望まれ、これより、高木氏を冒せり。與兵衛苦心の結果、新に清凉劑たる清心丹及び婦人用たる清婦湯の二藥品を調劑し、忽ち世の賞賛を博せり。就中清心丹は、明治七八年頃の創製にして、西南の役、普く官兵に配布せられ、日清日露兩戰爭に際し、益々其効果を奏し、其間支那朝鮮南洋等に販路を擴張し、年々數十萬圓の産額を見るに至れり。嘗て東京藥品株式會社の取締役に推され、明治二十四年東京商業會所設置せらるゝや、直に其會員に選ばる。晩年家を養嗣子某に讓り、清壽と號し、大正二年十二月を以て歿す、年七十七。

江澤金五郎

江澤金五郎。夷隅郡大多喜町の人、江澤半右衛門の五男にして、嘉永五年四月三日を以て生る。家素商にして、書籍及雜貨を販賣す。幼にして穎悟、十二歳の時、藩主松平侯の前に於て、論語を講ぜしと云ふ。夙に東京に出で、出版業を開き、通信の方法を創じむ。これ本邦通信販賣の嚆矢なりとす。明治十二年京橋區尾張町に商館を建築し、天賞堂と號し、篆刻業を兼ね。將來時計の需用多きを察し、明治二十一年より出版業を廢し、時計及び美術品の販賣を開始し、伊藤博文を始め、要路の紳士と交際し、明治二十八年より、外國美術品の直輸入を開き、内閣勸業博覽會陳列製作品につき、懸賞を以て、意匠を廣く全國より募集せり。これ本邦に於ける懸賞意匠募集の權輿なりとす。而して外國品を輸入すると共に、盛に内地美術品を海外に輸出し、天賞堂の名聲、内外に轟けり。明治二十九年八月相州大磯海水浴中誤て溺死す、年四十五。金五郎人と爲り、精力絶倫、百難を排して進むの氣慨あり、嗣子金五郎亡父の遺志により、鄕里大多喜町に獨力圖書館を設け、天賞文庫と稱し、地方敎育に貢獻せり。

福原有信

福原有信。安房郡松岡村福原市左衛門の子にして、弘化四年三月を以て生る。其先里見氏に出で、世々里正にして、醫を以て業とす。有信幼にして穎悟、十

二歳の時醫師たらんと欲し、江戸に出で、名醫織田研齋の門に入り、後更に幕府の醫學所に轉じ、石黑忠悳、池田謙齋、佐々木東洋、長谷川泰、樫村清德、大澤謙二等と共に、塾長松本良順の指導を受く、慶應四年正月維新の變亂起り石黑、樫村、大澤等各藩に召返され、松本塾長は、佐倉藩醫佐藤泰然の二男にして、幕醫と爲れるものなれば、佐幕黨に通じ、渡邊洪基等と共に會津軍に投じげるに、福原有信は、田代基德と共に、醫學所に止まりて醫務を執れり。亂後大學東校に學び、卒業後兵部省に出仕し、海軍病院藥局長を命ぜらる。同局長に任ずること數年、早くも醫藥分業の適切なることを感得し、明治五年冠を掛け、京橋區出雲町に一藥舗を開き、資生堂と號し、翌六年更に有志と共に藥品會社を設立し、事志と違ひ、非常なる困難を來せり。然るに益勇を皷し、粗製藥品の輸入を防遏すると共に、內地藥品の濫造を矯正せんと欲し、遂に大日本製藥會社の創立をみるに至れり。明治十三年以來、日本藥劑師會頭。大日本製藥會社常務取締役。日本赤十字社評議員等に選まれ、また東京商業會議所常議員たり。明治三十三年歐米各國を巡歷し、保險事業を視察し、帝國生命保險會社長として、敏腕を振ひ、內外の信用を博せり。大正十三年四月歿す、年七十八。

政治家

木內重四郎

木內重四郎。山武郡千代田村の人、木內重郎兵衛の二男にして、慶應元年十二月を以て生まる。千葉中學第一期生にして、常に首席を占め、明治十四年七月同中學を卒業し、高等中學を經て、東京法科大學に入り、二十一年同大學を卒業し、更に大學院に入り、二十二年法制局參事官司補となり、次て貴族院書記官、農商務省參事官、內務省書記官、行政裁判所評定官、農商務省農務局長、商工局長、統監府農商工務總長、同參與官、特許局長、朝鮮總督府農商工部長官、韓國政府內務部次官、同農商工部次官等に歷任し、其間歐米諸國に派遣せらるゝ、事前後二回に及び、明治四十四年貴族院議員に勅選せられ、大正五年四月京都府知事に任じ、同七年五月冠を掛け、爾來下總市川町鴻台の別邸に閑居し、悠々老年を養ひ、同十四年一月九日を以て歿す、年六十一。木內氏人と爲り、謹厚にして穎悟なり、大學卒業當時秀才を以て稱せられ、故岩崎彌太郎の女婿に選ばる。妻磯路は、即ち總理大臣加藤高明夫人の妹なり。嘗て第五回內國博覽會及日本大博覽會の評議員、東京高等商業學校評議員等に推擧せらる。

關　和知

關　和知。長生郡東浪見村綱田の人、明治三年十月を以て生まる。小學校を卒業するの後、同郡二宮本郷村蘆村塾に入り、漢籍を修め、家政裕かならざるを以て、僅かの俸給を以て、暫く代用教員を勤め、後東京に出で、早稲田專門學校政治科に入り、同二十八年同校を卒業し、千葉縣改進黨の機關たる千葉民報の主筆と爲り、健筆を振ひ、異彩を放ちしが、不幸廢刊の已むなきに至れり。是に於て自ら新總房を發刊し、孤軍奮鬪、遂に千葉縣下に於ける有力なる日刊新聞たらしむ。後感ずる所あり、明治三十二年東京英語學校に入り、英語を學び、五十嵐敬止の後援により、三十五年米國に赴き、エール大學に入りしが、五十嵐氏失脚の爲め、學資を斷たれ、已むを得ず、ブリンストン大學に轉じ、勞働に服しながら、同大學に於て、政治、經濟、社會學等を研究すること數年、マスターオブアーツの學位を得、三十九年歸朝し、萬朝報に聘せられ、論文及飜譯に從ひ、白洋の文名、都下に喧傳せられ、後東京毎日新聞社に入り、編輯長と爲り、政治界に入るの機會を待てり。明治四十二年衆議院議員補缺選擧に際し、進歩黨の公認候補として千葉禎太郎と爭ひ、不幸落選し、暫く英文日本之產業編輯に從事し、大正三年大隈内閣の時、内務大臣秘書官となり、同四年三月衆議院議員に選ばれ、爾來同議員に選擧せれる、こと前後七回、憲政會の領袖として重きを措かれ、政界稀に見る人格者たり。嘗て大隈内閣の時、司法省副參政官に任じ、大正十三年八月加藤内閣にて、政務次官及參與官を新設するや、推されて陸軍省政務次官に任じ、未來の大臣として、大に前途を囑望されしが、同十四年二月十八日を以て歿す、年五十六。特旨を以て從四位に叙し、勳三等たり。同月二十二日青山齋場に於て、陸軍葬祭を行はる。實に房總人物として、哀惜に堪へざるのみならず、國家の一大損失といふべし。

學術家

松崎藏之助

松崎藏之助。君津郡松岡村の人、松崎圭輔の長男にして、元治元年三月を以て生まる。夙に東京法科大學に入り、明治二十一年優等の成績を以て同大學を卒業し、同二十三年農科大學助教授に任じ、同二十五年文部省より、獨佛二國に留學を命ぜられ、彼國にありて、財政及農業經濟學を研究すること五ケ年、同二十九年歸朝し、同年七月直に東京農科大學教授兼法科大學教授に任ず、時

に年三十三。同三十二年法學博士の學位を授けらる。三十五年東京高等商業學校々長に專任し、同校に在ること七ケ年、四十一年商科大學問題起り、引責して辭職し、久しく不遇の境遇にありしが、大正八年四月東京法科大學經濟部教授に任じ、兼ねて帝國學士院會員たりしが、不幸病に罹り、同年十一月を以て歿す、年五十七。著はす所、財政學。經濟學要義。農業と產業組合。列强戰時財政經濟政策。最近歐洲列强の財政及金融。文政危言等あり。

井上　密

井上　密。安房郡由基村の人、富坂齋治の第二子にして、慶應三年十月を以て生る。長ずるの後、上總大多喜舊藩士陸軍大尉井上義行の養嗣子となれり。明治二十五年東京法科大學を卒業し、更に大學院に入りて研究を重ね、同二十九年憲法學及行政法研究の爲め、獨佛英三國に留學し、歐洲に居ること三ケ年、三十二年歸朝するや、直に京都法科大學教授に任じ、三十四年法學博士の學位を授けらる。三十九年京都大學長に昇進し、四十二年再び海外へ差遣され、英米二國の學事を視察し、四十三年六月歸朝し、更に法科大學教授に再任し、京都大學内の重鎭たり。大正二年休職を命ぜられ、少しく閑散の身となりしが、同三年三月京都市長川上親晴に代り、同市長に推擧せられ、同五年七月病を以て辭任し、同年九月遂に歿す、年五十。

八代國治

八代國治。市原郡上高田村の人、本姓は鈴木氏、明治六年を以て生る。夙に東京に出で、國學院に入り、國語及國史を修め、卒業の後、東京帝國大學史料編纂官と爲り、初め鎌倉時代を研究し、後南北朝時代の編纂主任となり、殊に力を莊園制度に注ぎ、又宮內省の委託を受け、皇室御料地の沿革を調査し、大正九年十一月多年の研究に成れる、「長慶天皇御即位の研究」を發表し、同十一年十二月文學博士の學位を授けられ、同十三年四月を以て歿す、年五十二。八代博士は、史料編纂官たるの外、其の母校たる國學院大學講師として、鎌倉及南北朝時代史を講授し、傍ら著述に從ひ、井野邊、早川兩氏と共に、國史大辭典なる尨大の辭書を編輯して、史界を碑益せしめ、又房總の歷史に貢獻する所少からざりき。而して、最も苦心したる長慶天皇の御即位は、所謂千古の疑義を解決せるものにして、皇位の歷數に御一代を加算すべく、實に史學上不朽の功績なりとす。これを以て博士歿するの後、即ち大正十三年四月十二日恩賜

賞を授與せらる。此他御歷代史實考査委員會の設置せられしも、主として博士の研究に成れり。遺著若干中、莊園制度の稿本數十冊あり、前人未發の新事實多しと云ふ。

房總之偉人（終）

大正十四年八月廿八日印刷
大正十四年九月　二日發行

定價貳圓
郵稅八錢

著作者　林壽祐　千葉縣千葉市千葉五二二番地
發行者　能勢鼎三　千葉縣千葉市千葉五四八番地
印刷者　岩倉順造　千葉縣千葉市千葉五四八番地
印刷所　千葉活版所
千葉縣千葉市千葉本町三丁目

發行所　多田屋支店

不許複製

534
101

終